図書館は屋根のついた公園
本がひとをつなぐ

講演　岐阜市立中央図書館　館長　吉成　信夫　氏

「ここにいることが気持ちいい。
何度でもここに来たくなる。
いつまでもここにいたくなる。」

岐阜市立中央図書館の内部（公式ホームページより引用）

波打つ屋根、大きく開かれた窓―奇抜な外観に度肝を抜かれる図書館の、モットーです。「開館直前3カ月」に館長就任。スタッフと知恵をだしあいつくられた図書館は、全国的に注目を集めています。

「募集要項は〝歌って踊れる司書〟」「市民によりそった〝滞在型図書館〟」「みんなでつくった書架ディスプレイ」―これまでの既成概念を打ち破る図書館の誕生は、こんなひとつひとつのとりくみの継続でした。吉成信夫氏は元来図書館職員ではなく公募で就任。

毎朝「明日のためのキーワード」でワンポイントレクチャー、「みんなで朝のブックトーク」は司書がみずからのおススメ本を1冊紹介。そうした積み重ねが、ベテラン職員の心を動かし、大事業が「我がこと」になります。「チーム」となり枝葉を大きく広げ、だれもが大樹の下でくつろげるような図書館づくりにつなげられました。

「館長のチャレンジ精神、ひとを巻きこんでいく力など、すごく惹かれました」（医師）／「ひとりひとりのモチベーションをゆさぶって、力を引きだすアイディアに感銘を受けました」（看護師）／「既成概念を打ち破るとりくみや発想に業種は異なっても非常に参考になりました」（事務）など多くの感想が寄せられました。当日は、健康友の会みみはらのみなさん、「ホームページ情報を見て」遠方からかけつけてくださった参加者も。

ひとをつなぐ「居場所づくり」「組織づくり」のうえで、大切なものを教えていただきました。

異文化コミュニケーションカンファレンス
10月20日　みみはらホール

異文化コミュニケーションカンファレンスとは？

医療・病院の中にだけ目を向けがちな私たち医療従事者に、外（＝社会）にも関心を持つきっかけになる企画になればと、幅広い分野から講師をお招きし、お話しいただいています。

シリーズ　現場からの視点　その21

心ひとつに　利用者も　地域も　職員も守る

被災地熊本の医療・介護を支える支援活動に参加して

2016年4月14日と16日、熊本県を2度の大きな地震が襲いました。4月20日から始まった全日本民医連の医療・介護支援に、同仁会からも多くの職員が現地へ向かいました。介護施設での支援の取り組みを紹介します。

◇　◇

4月27日から30日まで、熊本市内のサービス付き高齢者住宅「八王子の杜」への支援に参加しました。震災から半月経ち、ライフラインは復旧していました。しかし、施設の建物はいたる所に亀裂が入っていて、余震も頻回に発生し強く揺れた時は、不安な表情を浮かべる利用者もみられました。

支援内容は、主に朝の体操や挨拶レクリエーションの実施です。現地の職員から「震災以降、歩行する機会が少なくなり下肢筋力が低下している。筋力の低下予防を行って欲しい」という要望があり、下肢運動に重点をおいた体操を実施しました。

2日目は天気が良く穏やかな気候だったので、筋力維持や気分転換を兼ねて散歩レクリエーションを行いました。いざ外に出ると、ブロック塀が倒れていたり、大量のゴミが山のような状態のままになっていたり、公園には車中泊をされている方々の車が、複数駐車していました。わずかな距離の間にも、地震の爪痕があちらこちらに見受けられました。

そんな環境の中、30分程の散歩でしたが、利用者からは「久しぶりに外に出て気持ち良かった。こんなにお喋りするのも久しぶりで楽しかった」と感想をいただきました。

職員自身も被災し自宅が全・半壊被害を受け、避難所から出勤されている方も。職員の方も辛い思いをしているのに、それを感じさせず利用者に寄り添われている姿を見て、逆に励まされました。

震災から半年が経過した頃、八王子の杜から色紙が届きました。写真やメッセージ、お礼状が入っていました。最終日に「楽しい2日間を送らせていただきました。また熊本へ遊びに来てくださいね」という言葉が思い出されました。利用者さんの元気そうな表情を確認でき、とても嬉しく心が温かくなりました。

大きな災害が続きますが利用者・職員の皆さんがお元気で過ごされることをお祈りするとともに、復興に向けた支援の継続と細やかな対応に、全国の仲間と取り組みたいと感じました。

（介護老人保健施設　みみはら　介護福祉士　北田　賢治）

「八王子の杜」からのお礼状